海外派遣プログラム報告書

井筒土筆

I 概要

派遣先：自由権規約委員会（ジュネーブ）

派遣期間：2017年7月3日～7月28日

II 業務内容

1. 自由権規約委員会の審議の傍聴

今回私は、岩澤雄司先生の助手及び国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）のインターンとして、自由権規約委員会 120 会期にて研修を行わせて頂きました。

研修のメインとなる業務は、自由権規約委員会の審議（国家報告審査、個人通報審査、一般意見採択に向けての審議等）の傍聴です。審議には一般に公開のものと非公開のものがありますが、非公開の審議も傍聴させて頂き、国家報告審査の際に NGO との間で行われるブリーフィングにも参加させて頂きました。また、個人通報事件については、委員会でも結論について意見の分かれている一件について、自分の考えを簡潔にまとめる作業を致しました。

2. 国家報告審査における対象国への口頭質問のドラフト起草

120 会期では、前会期にて岩澤先生が同委員会の委員長に選出されました関係で、対象国への口頭質問は、岩澤先生は本来ご担当されないはずでしたが、委員の一人が急病でご欠席されたため、その担当分を岩澤先生も含めた他の委員で急遽分担することとなりました。岩澤先生のご担当分のうち、パキスタンについて2つの口頭質問のファーストドラフトを担当しました。

3. 他の国連機関、条約機関の会議の傍聴

事前に岩澤先生の許可を頂戴し、女性差別撤廃委員会（CEDAW）や国際法委員会（ILC）等の公開の会議を傍聴させて頂きました。

4. 在ジュネーブ日本政府代表部・各国際機関に勤めておられる日本人職員の方々へのご訪問

岩澤先生のご紹介により、在ジュネーブ日本政府代表部、世界貿易機関（WTO）、世界知的所有権機関（WIPO）をご訪問させて頂き、担当官の方、日本人職員の方々からお話をお伺いする機会を頂きました。また、岩澤先生からは OHCHR の職員の方もご紹介頂き、お話をお伺いさせて頂きました。更に、お会いした方からのご紹介で、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）にもご訪問させて頂き、日本人職員の方からお話をお伺いする機会も頂きました。

III レポート

1. 自由権規約委員会での研修

自由権規約委員会の審議の内容は多岐に渡りますが、特に印象に残った国家報告審査及び個人通報審査についての感想を中心に述べたいと思います。

国家報告審査は、国家の代表団を招致して対話を行うとあって、全体を通じて相応に格式張ったやりとりが続き、代表団・委員の双方にお互いを尊重する態度が顕著に見られました。特に報告が既に複数回目となる国家については、委員会の進行に慣れているためか、委員の質問に対しても粛々と回答し、会議全体も大きな滞りなく進んでいたため、このまま形式的に進行するのだろうか当初は感じていました。しかし会議が進んでいくと、委員からの質問に対し、代表団が質問とずれた回答をしたり、質問者の委員の中で、重点的に問題視すべきとのコンセンサスがおそらくできている質問に対して、質問の中でその点を特に強調されているにも拘らず、回答順を後回しにしたりして明確な回答を回避しているのではないかと思われる場面もしばしば見られるようになりました。勿論各国家についての報告時間は限られており、代表団が即座に回答できないような詳細な統計等に関する質問も含まれているため、口頭での回答が不十分になるのはやむを得ない点もあるとは思いますが、それでも傍聴していて、特定の人権問題を軽視しているのではないかと感じてしまう場面は度々ありました。後から伺った話によると、国の発展状況や慣習等それぞれのコンテキストによって重視している人権に違いがあることが、特定の人権問題に対する考え方に少なからず影響を与えているとのことでした。つまり、国によってはある権利を侵害しているとの認識がそもそも希薄なので、回答が淡泊になるのもやむを得ないということが一因としてあるようです。人権と一口に言っても、社会的経済的背景が全く違う国々の間で、まずはその定義から共通の意識を形成し、一步ずつ国家の自発的な人権保護に向けての改革を促すしかないことは、非常に困難な道程であると感じると共に、その重要性を再認識しました。

ただ、困難な道であるとはいえ、人権保護の実現に向けては着実に各国が動きを見せていると感じました。過去に行われた国家報告に対する公開のフォローアップ審査でのことです。委員会の勧告に強制力はないにも拘らず、重要な問題については各国が委員会の指摘に沿って人権保護に向けた取り組みを行っていたのが印象的でした。勿論、そのような取り組みは国際社会における評価向上のためであったり、国内世論に後押しされてという理由があるのかもしれませんが、人権保護の実施状況としてはまだまだ不十分との委員からの厳しい評価を受けていた人権領域も少なからずあるようでしたが、委員会の勧告を受けての人権保護への迅速な着手は、人権の重要性について一般社会の周知を高めることに着実に寄与していると思いました。そして委員会側も、国家の人権保護の進捗状況について、評価すべき点は非常に高い評価を与えているので、国家にとっては国際的な評価を上げることにも繋がり、結果的により人権保護に前向きとなる、という効果的な連鎖がきちんと実現していると感じました。また、今会期では、日本についてのフォローアップ審査も行われており、その審議に立ち会えたことも幸運でした。自国の人権問題への取り組みが国際社会や人権の専門家たる委員から果たしてどのような評価を受けているのか、日本

国内で触れる情報だけでは不透明な部分もあったので、客観的な立場からの議論を傍聴できたことは、たいへん貴重な経験になりました。

次に、個人通報審査については、審議は全て非公開なので内容については触れられませんが、国家報告審査とは打って変わり、受理可能性と本案の2段階の審査がある点や、権利侵害の被害者であることの十分な立証を要求する点など、準司法的な手続の下、より法律的な議論が展開され、非常に身近に感じることができました。印象的だったのは、自由権の侵害の有無が直接の争点となる自由権規約委員会の特性上、ともすれば人権の重要性だけを過度に強調する「べき論」に陥りかねない事例を、あくまでも法律論として議論する、そのバランス感覚の難しさです。自由権規約委員会の個人通報制度は、人権侵害の被害者にとっては最後の砦ともいえることから、法律的に考えすぎると委員会の意義が果たせなくなる一方、きちんと先例との区別をしなければ判断に一貫性がなくなってしまうため、全ての委員がそれらに細心の注意を払いつつ、ご自身の意見を述べておられました。もっとも、どの委員も高名なスペシャリストの方々ばかりなので、非常に個性的で意見を曲げない場面もあるなど、委員長の岩澤先生はたいへん苦心しておられましたが、最終手段としての投票ばかりに頼らず、多くの委員から多様な意見を引き出しては集積し、限られた時間の中で議論をリードなさっていく手腕には只々驚かされました。

2. 他のインターン生等との国際交流を経て

会期中は、他の委員の先生の助手や、他の国際機関や事務局のインターン生など、私とほぼ同年代の各国の方々との交流する機会が多く、休日も含めインターン生同士で食事等一緒に時間を過ごし交流を深めることができました。彼らの中には、国際法を研究し学者を志す人もいれば、既にローヤーとして働いている人もおり、また、ジャーナリストやエンジニアを志している学生もいました。多様な角度から自国の人権問題に関心を持ち、或いは国際組織と将来関わりながら法曹として活躍しようとしている彼らと議論し、将来について語り合うことは、大きな刺激になりました。また、彼らとの会話の中で日常的な英語表現の仕方を学び、自分の英語表現に取り入れていけたことも、とても有意義でした。それまで選択していた単語やイディオムが、日常的に使うものとしては随分と固い表現であったことに何度も気づかされました。

もっとも、コミュニケーションをとる上では、やはり自分の英語の実力不足を痛感しました。彼らの中には英語のネイティブスピーカーもいましたが、そうでない人も当然のように英語を使いこなしており、また、ネイティブの人であっても、他の国連公用語の少なくとも一つについては、議論を理解する程度の語学力は当然に備えています。そんな彼らと意思疎通はできても、日常会話から専門的な議論に至るまで、自分の意見をしっかりと言葉にして伝えようと思うと、どうしても単語が咄嗟に浮かばず詰まってしまうことが多くあり、稚拙な単語で言いたいことの半分も伝えられなかったり、相手の方が先に察してこちらの言いたいことを要約されてしまったりして、その度に不甲斐なさを感じました。また、委員会の審議では、国家の代表との建設的対話や、他の委員への説明や説得が主眼となるため、英語も丁寧で比較的聞き取ることができましたが、インターン生らとの会話

では、誰もが非常に早口でかつ出身国による訛りもあり、私自身それまでリスニングがとりわけ苦手だった訳ではなかったにも拘らず、何度も聞き返さざるを得なかったことは、やはり非常に悔しい思いをしました。同年代の彼らとの交流は、将来働いていく上で再び彼らと道が交わる可能性への期待に胸が膨らむ一方で、そうなったときに肩を並べられるに足る語学力の習得に向けて、決意を新たにさせてくれました。

3. ジュネーブで勤務されておられる方々にお話を伺って感じたこと

前述の通り、この研修中、ジュネーブで勤務されておられる日本人の方々とお会いする機会を何度か頂戴致しました。中でも印象に残っているのは、日本人が国際機関で働く上で向き合う困難と、ワークライフバランスについてのお話です。

お話を伺うまでは、国際機関に拘らず日本人が海外で働く上では、兎にも角にも語学力、特にリスニングやスピーキングが壁になるのだろうと当然に感じていました。しかし、今回国際機関で働いておられる皆様のお話を伺って感じたのは、語学というものの捉え方がそもそも違うということです。WTO の日本人職員の方のお話では、国際機関で働く人にとって英語ができることは大前提であり、日本人の基準で英語ができることは全く無意味で、母国語レベルで完璧でないと話にならないし、特に法曹としての立場から国際機関に関わるのであれば、寧ろライティングの技術が非常に重要になり、リーガルプロフェSSIONALとしての書式を備え、ネイティヴから見て巧みと言える表現を使いこなして初めて、「エリート」として評価されるのだ、と仰っていました。「エリート」の捉え方も日本と世界とでは大きく異なります。WTO における日本人職員の方は現在5人しかおられないのですが、これは先進国の中ではかなり少なく、勿論語学力の問題もありますが、海外の人にとってのエリートとは、国内に仕事を求めずより活躍できる場を求めて国外に職を求めらるものであるのに対して、日本人の感覚では当然に国内の優良企業へ就職しようとするという内向きの風潮が強いためである、とその方は仰っていました。お話を伺ってみて、国際社会における日本の貢献や評価の高さに鑑みると、本来はもっと国際的に活躍する日本人がいて良いはずなのに、日本人の意識一つの問題でその機会が知らないうちに失われていたのかもしれないと考えると、非常に勿体なく感じるとともに、私自身、日本の英語教育で十分に素地は身に付いているはずなのだから、臆せずにコンスタントに英語に触れ、国際社会と積極的に関わっていかねばならないと感じました。

ワークライフバランスについても、想像していたものとは大分印象が変わりました。アプライの方法にも依りますが、国連機関のポストは必ずしも固定的なものではなく枠も狭いため、ポストに空きがなければ希望の職に就けず、常に試験を受け続けてキャリア形成を図らなければならない環境に置かれることは少なくないそうです。また、多くの国連機関では定期的な任地の転勤が義務化されるため、時に家族も連れていけない危険な地域での勤務や、そうでなくとも子どものためのインターナショナルスクール等のないような地域での勤務もしばしばあり、家族との生活の充実の点では犠牲になる側面はどうしてもあるとお話でした。それでも、現地で働いておられた皆様は、ご自身のお仕事に誇りとやりがいを感じ、お忙しいながらもとても生き生きとしておられたように感じました。これ

に関して、OHCHRの職員の方が、国連職員になるのはゴールではなく手段の一つに過ぎず、なった後に自分が何を達成したいのかが大事だ、と仰っていたのが心に残っています。将来どのような形で国際社会と関わるにせよ、ワークライフバランスの充実のために、自分がどのようなキャリアパスを望むのか、改めて考えさせられました。

IV 終わりに

岩澤先生の講義を受けて国際通商の分野に興味を持ったことに始まり、様々なコンテクストを持つ地域国家の代表者の集まる国際機関における意思決定へと関心が広がり、そしてこの度、この海外派遣プログラムへ参加させて頂きましたが、想像していたよりも遥かに多種多様な価値観や考え方、そして各国の矜持が主張し合い、それでもそれらを互いに尊重し合って解決策を探る様子に触れ、国際社会のあらゆる意味での巨大さを実感しました。この研修から得た知見を糧に、今後も継続的に英語に触れて研鑽を積み、将来は法曹としての立場から国際社会に積極的に関わっていきたいと思っています。

最後になりましたが、委員長として多忙を極める中、私を助手として快く受け入れ、たくさんの指導をして下さった岩澤先生、このような貴重な機会を与えて下さった岩村先生、藤田先生、後藤先生、手続等でたいへんお世話になりました事務局の川村様、ご支援を頂いた企業の皆様方に、心より感謝申し上げます。そして、ジュネーブでの滞在中、ご多忙の中、貴重なお時間を割いてお会いして下さいました皆様にも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。